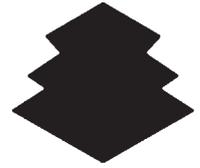


リニア時代を迎える飯伊地域の資源 (10)

小笠原氏 (1)
～文化力で異彩を放つ名門～



小笠原氏の代表紋 三階菱

リニア時代を迎える当地域の資源について考えるシリーズ。これまで「飯田線」、「南アルプス」を取り上げてきた。久々の再開となり、新たなテーマは「小笠原氏」となる。

1. 清和源氏の流れ

「(飯田に関係の深い) 小笠原氏は甲斐源氏だから」。今から20数年前、近所の郷土史を研究されている方との雑談の中で偶々出てきた言葉。己の浅学を恥じたものでした。

天皇家を出自とする武士団の中で清和天皇の系統は最も有名であり、殊に満仲三男の頼信が河内(現大阪府)を根拠地とした河内源氏は武士団のエース中のエースとなる。前九年・後三年の役で功を挙げた源 義家(八幡太郎)の弟義光(新羅三郎)の子義清は常陸の国(今の茨城県)武田郷に拠点を置き武田姓を名乗る。義清・清光親子はその後甲斐(同山梨県)へ移り、以後武田晴信(信玄)に至る甲斐源氏として伸張していく。

清光の孫の長清ながきよは甲斐の小笠原郷(北杜市と南アルプス市の説あり)を拠点として小笠原を称し、小笠原氏祖となる。

2. 小笠原氏の飯田地域との関わり

甲斐源氏小笠原氏が信濃特に当地域との関わりが始まったのは、初代長清から7代目となる貞宗が南北朝時代足利尊氏に与して奮戦し、信濃守護職と伊賀良庄を安堵された(下伊那史)ことにより、この頃から小笠原氏が伊賀良庄に居住するようになったとされる。

伊賀良庄は現在の飯田松川から阿智川の間、天竜川右岸の広大な範囲となる。小笠原氏は当初鼎名古熊の田中(運松寺付近)から後に松尾城に移ったのであるが、平時は一段下の松尾しょうぶの城地籍に住んだ(松尾館)と考えられているという(伊賀良村史)。

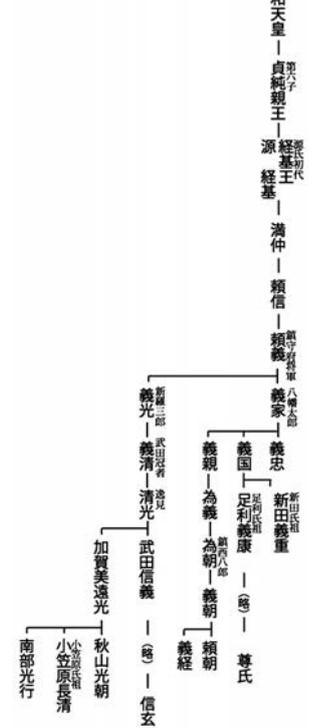
松尾城の関連では、伊賀良井(大井)の開発が小笠原氏によって開発されたとされる(同)が、冒頭記した郷土史家の新井利彦氏は、小笠原氏入部の頃の名古熊の収量は相当あり、既に田の開発がある程度進められていた(井が既に開設された)こと、近年の古井筋の発掘で得られた出土物の内容から、別の文書(北方郷旧記など)が言うとおり、開発が平安時代(承保年間)に遡ることも可能と見ている。

伊賀良庄はその後範囲を拡大し、三遠境の新野や平谷まで及んでいる(下伊那史)。

3. 小笠原氏の内訌と奮闘

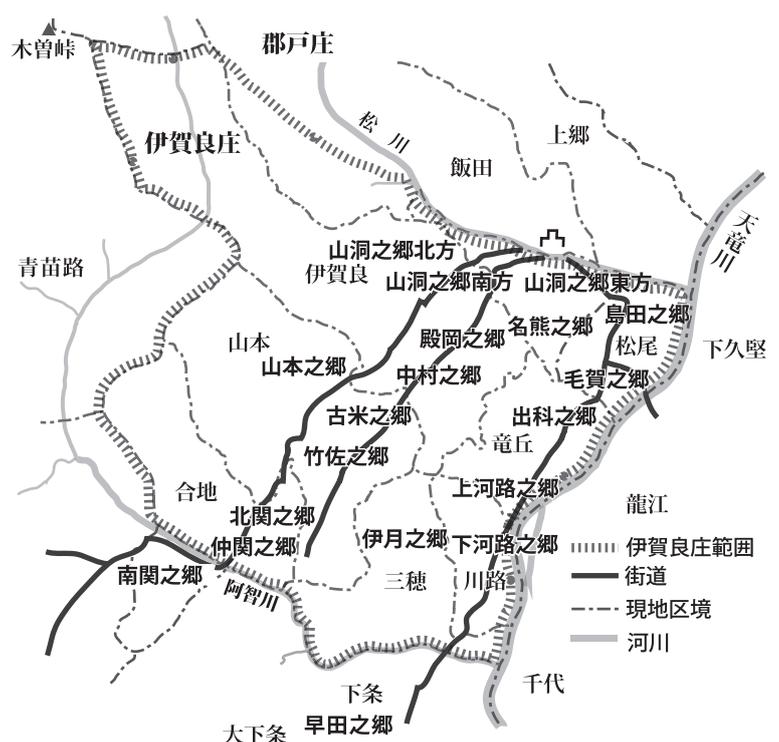
貞宗の孫長基の死後長兄長将の系統である深志系と松尾系による家督争いが始まる。ま

清和源氏と小笠原氏



伊豆木小笠原資料館展示の系図を基に加筆省略

伊賀良庄の郷名 天正7(1579)年



(新井利彦氏 作成資料より)

た飯田においても松尾城と鈴岡城の系統による争いとなる。小笠原氏の惣領職を巡る争いは鈴岡小笠原の滅亡により府中(深志)小笠原の長棟の時に統一され、府中・松尾両系統が残る形となったが、その後信濃は本家筋の甲斐武田氏の信濃侵攻を受け、対応を迫られることになる。府中小笠原では武田勢に府中を攻められ長時、貞慶は2代にわたり30年余の旅生活を送った。深志に戻ることが出来たのは武田勝頼の甲斐武田が滅亡してから。貞慶は深志を「松本」と改め、現在に至っている。府中小笠原で特筆すべきは秀政・忠脩親子の大坂夏の陣での戦死であろうか。天王寺口の徳川家康本陣の前衛に布陣していた秀政・忠脩親子へ豊臣方が急襲、両名とも落命。本陣まで迫られたものの最終的には押し返し、この戦いの中豊臣方真田信繁(幸村)も討ち取られることになった合戦となる。

松尾小笠原は武田勢に属した後、織田信長の信濃・甲斐侵攻時に織田勢に降り、本領を安堵された。両家ともその後は豊臣・徳川政権の下で転封を重ねていくが、幕末・維新まで存続する。

当地域のもう一つの小笠原氏である伊豆木小笠原氏についてであるが、松尾小笠原氏の信貴の次男長巨を祖とする系統で1千石の旗本として維新・現在まで繋がっている。伊豆木小笠原氏は一般の旗本と異なり、参勤交代が課せられた旗本で「大名級の別格扱い」(長野県立歴史館村石正行氏)であった。当地の同じく阿島知久氏、山吹座光寺氏と共に「信濃衆」と呼ばれ交替寄合衆を勤めた。村石氏は「飯田藩の外様である脇坂氏への牽制・監視の役割があったのでは」と言う。国重要文化財の旧小笠原家書院が今も遺る。

4. 「小笠原流」の始まり

小笠原氏を考える上で欠かすことができないのが、弓馬に関する礼法を確立し伝えている家であることである。初代長清が頼朝の命により弓馬故実を議論(1194年)など、当初から弓馬に秀でた家と見做されている。貞宗の代に、宋の僧清拙正澄に学び作法を制定した(下伊那史)。小笠原家ではこれを「糾法的伝」(弓術・馬術の礼儀作法)と呼び小笠原家の中で限られた者に伝える(父子相伝)。小笠原氏の惣領職を巡る争いにはこの家伝文書の相続争いが展開したもの(下伊那史)とも見られている。糾法的伝の内容を受け継ぐ受伝者は府中系、松尾系に亘っており、松尾系である長巨も受伝者であり、伊豆木小笠原には膨大な量の伝書が保管されているという(下伊那史)。

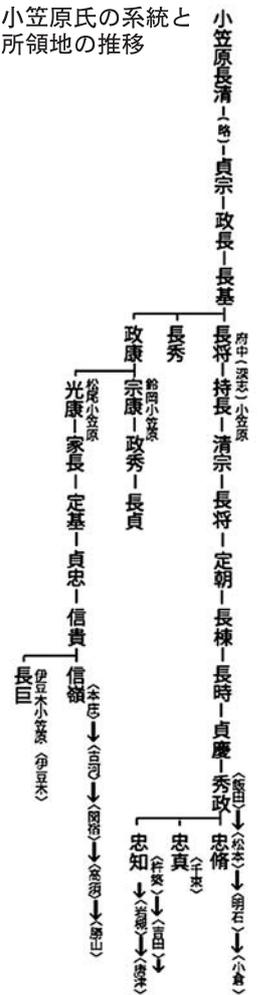
5. 全国の小笠原氏の地を見渡すと

府中系・松尾系小笠原氏の各家は幕府の「転勤辞令」により全国を転々とするが、何れも明治維新まで存続している。小笠原氏が鎌倉時代に始まり現在まで永らえた要因として前出の長野県立歴史館村石正行氏は、「①ネットワーク力=足利將軍家や信長、秀吉、家康との交渉力、②有職故実の家=交渉力の裏付け、③大坂夏の陣での奮戦」を挙げている。武威もさることながら小笠原氏の文化力が存続を助けたことになる。

各地の小笠原氏の事績および各地域の小笠原氏に対する意識に着目したのが、愛知県椛山女学園大学教授の山根一郎氏である。大学で礼法(小笠原礼法)を教える山根教授は自身のブログ <https://blog.goo.ne.jp/yamanei/e/> において「小笠原氏史跡の旅」と題し、全国の小笠原氏縁の土地(飯田へも)を訪れ紹介している。その中で「(小笠原氏の)地元意識を持っているのは」として「福井県勝山市」「山梨県南アルプス市」「北九州市小倉」を挙げている(越前勝山の項)。逆にいうとそれ以外の各地域の意識は今一つということになる。

しかしながら近年、小笠原氏をテーマとした地域ぐるみの取り組みを重ねて盛り上がりが見られるのが飯田市三穂地区である。前述の伊豆木小笠原氏の旧小笠原家書院築400周年を記念する事業として、メインイベントの「記念祭」を本年10月26日に開催する。三穂地区の当該事業については次号以降で順次詳報していきたい。

小笠原氏の系統と所領地の推移



下伊那史資料の系図を基に作成
くは維新までの所領地の推移

三穂地区イベントのイラスト



(イラスト書道家 和全氏 提供)

(飯田信用金庫 しんきん南信州地域研究所 リニア・三遠南信対策室 加藤 修平)